

「ゆりの樹幼稚園の教育は

未来を切り開く 感動する脳 を作る!」その3

ゆりの樹幼稚園

園長 高杉美稚子

いよいよ、今年度最後の園通信冬号「ゆりの樹幼稚園の教育は未来を切り開く 感動する脳 を作る!」その3を迎える時期が来てしまいました。

いつの間にか、カレンダーも一枚・・・薄くなった、カレンダーが壁にかかっている...その姿そのものが寂しげであり、この一年頑張ったよと誇らしげでもあります。そして真新しいカレンダーが分厚く、ピカピカに光って、さあ、次は私の番とでーんとその横でかまえています。

この時期の冬号のご挨拶はどう書いたらいいのだろうといつも悩みます。お手元に届くころは「メリー☆クリスマスクリスマス!」そして「よいお年をお迎えください」、幼稚園最後の園通信としては、「卒園進級おめでとう...そして卒園生のみなさん、さようなら・・・いつまでもお元気で・・・」さまざまな思いがこみ上げる最後の冬号だからです。

クリスマスコンサートでは、一年を振り返るカレンダーに託した歌とピアノそして素晴らしい絵のコンサート。

その歌声を聴きながら、今年の一年を振り返り、つい涙がこぼれ、一番後ろから鑑賞させて頂きました。

今年は吉塚の60周年、玄海、地島の5周年という記念すべき年であり、同時に、この基礎を築いてくれた、名誉理事長と叔父との別れというおめでたいことと寂しいことが重なった、波乱に満ちた24年でした。

その時期だからこそ「親孝行」ってどのように考えたらいいのでしょうかという質問を私にしてくださった方がありました。私と同じように親御さんの介護をされている方からでした。

私も、本当の親孝行ってなんなのだろうと、考えた一年でした。母も叔父も最後は、結局は何もしてあげられなかった・・・何もしないことが一番いい選択だと老齢の主治医から教えていただき、結果として二人とも、静かに、美しい笑顔で、亡くなっていったことは紛れもない事実でしたが。元気なうちに何かもっとしてあげられることはなかったと思う日々でした。

子どもを愛に可愛がると不良になることもあります、親孝行を一生懸命したら親が不良になったということはありません。親孝行にし過ぎはないはずなのです。

もちろん、人間、パーフェクトな事はありません。病気等によりどうすることも出来ないこともあります。その人の出来る範囲、またはそれ以上努力して広げられるならすこし範囲を広げて、できることをできるだけでいいから介護や親孝行を頑張ればよいと思います。

それでもなお。ああすればよかった...こうすればよかった...と思うのが親孝行そして「子育て」なのでしょう。

そして、し過ぎはないという、その点だけは違いますが「親孝行」とは「子育て」に通じるものがあると私は思います。なぜならば「親孝行」の事実の過去は変えられなく、「子育て」という経験したことがない「未来」を今、もっとも適切な決断することはともに難しいことだからです。

だから変えられない「過去を後悔」したり、まだ何が起こるかわからない「未来に不安」をかかえることより「今を感じて精一杯生きることが大切」なのでしょうね。

何かを始めるのにパーフェクトなタイミングはありません、あるのはベストなタイミングだけです。「何かを始めるのにベストなタイミングは常に今」と言う信条で生きてみましょう。

以前の巻頭言に掲載した「最後だとわかっていたら」の詩も思い出してくださいね。

その上で、精一杯自分の人生を全うすることが本当の意味での「親孝行」そして「子育て」だと思います。

もちろん、親にも、子どもにも家族旅行に連れて行ってあげるとか、肩を揉んであげるとか、子どもに何かをしてあげるとか、色々なお返しや子育てのあり方があると思いますが、親からみたら子どもである自分が、子どもからみたら親である自分が「自分らしく自分の信じた道を歩む事が最終的には親に理解してもらえ、子どももまっすぐに育っていくのではないかと思います。

そして親は子どもが（子どもは親が）生きていてくれるだけで幸せです。特に年老いた親は子どもが信じた道を生きて、幸せならば幸せなのだと思います。

人生は誰のために生きるわけじゃありません。すべては自分の人生です。

親は子どもからの見返りを求めない。子供は5歳迄に一生のお親孝行をしているといわれます。

だから親の愛は見返りを求め
ない「無償の愛」が親の愛です。
そして、それを今までもらって
きたのだから、それをそのまま

親には返せばいいし、子どもには求めないのがいいの
だと思います。自分が子どもを育てたようにほめること
も、認めることも、時にしかることも、ともに遊びなが
ら反省しながら一喜一憂しながら・・・介護する、親孝行
をする、だから、子育ても同じなのでしょう。

親孝行は考えなくてはいけないけれど、お返しの気持ち
というように考える必要はなく、自分の子どもがかわい
いように、自分の親が慈しんでくれたように(もちろん、
親が慈しんでくれな買ったと感じたとしても、そこで、
負の連鎖を切ることが大事ですから、そうでなくても、
いえ、そうだからこそ・・・) 親を大切にしたい気持ち
を持続し、常に家族として考えていくだけでもいいのだと
思います。

生んでくれてありがとう・・・育ててくれてありがと
う・・・生まれてくれてありがとう・・・私のこどもであり
がとう・・・嬉しい”良かった” ありがたい” とともに声
を掛け合いながら毎日を過ごすこと。当たりまえのこと
を当たり前、普通に、見返りを求めずに・・・

そして嫌なこと、つらかったことさえもそれがあつたから
成長できた・・・だからよかったと感謝していくことが大切な
のでしょう。

つぎに今年、見つめる時間が多かった「命」について考
えてみたいと思います。そして、それは『長生きの秘訣』
につながります。いろんな答えがあると思いますが・・・。

食事や、運動、栄養、心持ちなどがありますが一番効果
があることそれは何でしょうか？

それは・・・「長——いイキ
(息) をすることです。」ちょっ
とした空き時間にやってみて下
さい。

1) リラックスできる場所で静か
に座ります。

2) 自分が100歳まで生きるとイ
メージして口から出して、鼻から
吸う・・・このように2・3回深
——い呼吸をする。

これだけです。鼻から吸って口から長——く出すよりこ
の順がいいそうです。まずは口から長く息を出す、はきき
るから鼻から吸う・・・この順です。

朝起きた時や、夜寝る前、またはちょっと時間のあいた
時に、大きく深呼吸して、リラックスすることが大切です。
焦った時、パニックになった時、深呼吸以上に心を落ち着

かせるものはないそうです。

もちろん、本当にパニックになった時に深呼吸なんて
してはいられません。そんな余裕はないのです。だから、
このことをわざわざ書いています。どうか、焦った時、こ
のことを思い出して試してみてください。そんなちょっと
した習慣が、長生きをするコツになるかもしれません。

生きといえば・・・お正月にもっともめでたい言葉を書い
てくれと言われた和尚が「親死ね。子死ね。孫死ね」とい
う言葉を書いたそうです。

この言葉は順番になくなるのが一番幸せだという意味で
す。順番が逆になるほど悲しいことはないですね

「我は二人に対しては十分に報恩をなすことができな
い。その二人とは誰であるか。母と父とである」とい
う言葉があります。

究極の親孝行そして子育ては、親よりも長生きするこ
と、親よりも長生きしてくれるように育てることと思い
ます。親の最後を看取ることができること、子どもに看
取ってもらうことが一番の親孝行、子育てである気がし
ています。もちろん病氣や事故など、どうすることもで
きないことを除いて・・・

また、最後に今年を振り返って
みると、保護者の方のご協力や、
職員一人一人の献身的な努力と
心を一つに向かっていく心意気と
最後まであきらめない心がなくては、
吉塚の60周年、玄海、地島の
5周年を乗り越えることが出来
ない年でした。

私達、親、教師が人を育てることはなかなか大変な、そ
してやりがいのあることでことです。だからこそ、私達、
親や教育者にしか味わえない感動や充実感が待っています。

こどもが育つ姿が自分の喜びになる、これが大人です。
その時の行動の動機は「愛と思いやり」から出発すること
が大事です。

心が育ってこそ、愛と思いやりのある言動、行動ができ
るようになるからです。

これは前号で書いた内容です。その意味でゆりの樹幼稚園
のたくさんの行事とともに名誉理事長、寺尾の介護、葬
式、多くの法要事を滞りなくできたことは本当に保護者の
皆さんの力のご理解と職員の力、そして愛と思やりのある
言動、行動の結実の賜物と本当に感謝しています。ありが
とうございました。

この結集した力と感動を、ゆりの樹の教育へとこれから
も更に、広げていきたいと思っています。その為には保護者の
みなさんご協力ご理解と職員の一人一人の力を発揮するこ
とが必要です。そして、親も教師も、子どもたちも「自分

で自分に頑張ったね」と言える、来年にできるといいですね。これからも力を結集してさらに頑張ってまいりますので、来年もどうぞ宜しくお願い致します。

さて、「愛と思いやり」が育つ為に
必要な感情はいかにして育つかと
いうことを、まずは前号までに
書いてきました。

感情に気づくためには、子どもたちの心に残る原風景としての思い出としての体験をいくつ作ってあげるかです。

今回も茂木健一郎さんの『感動する脳』を参考文献に、ゆりの樹幼稚園の教育と重ね合わせて考えていきましょう。「少し小さい青の太い文字」で示したところは茂木健一郎さんの言葉をそのまま引用させて頂き、実線「—」は文章中略です。

「脳は一瞬とも休まない」
「生きるということはすなわち体験を
積んでそこから学ぶということ」

人は生まれてからその生涯を閉じるまで、実に多くの経験を積んでいます。赤ちゃんが初めておもちゃを握るという小さな体験から、時にはドラマチックな大きな体験まで、さまざまな体験を繰り返しながら私たちは生きています。そして一つ一つの体験を通して、実に多くのことを学んでいる。従って「生きる」ということはすなわち、体験を積んでそこから学ぶということなのです。

—（中略）—私たちは脳が休んでいる時間があると思ひ込んでいます

疲れて、仕事を辞めたとしてもそれは仕事について考えることをやめただけに過ぎません。

c 脳細胞は常に活動を続けているのです。

—（中略）—つまり、人間は生きている限り学び続けている。その学びには限界がなく、いろんなことを体験すればするだけ特に意識はしなくても、脳の中に痕跡として残っていくのです。

これは、まさしく、私が園長になってから、すぐに、（28年目ぐらいですね）教育方針として打ち出した
ゆりの樹幼稚園の「その年齢に応じた適時、適量の体験教育が重要である」ということを裏付けてくれています。

いまでこそ、体験教育という言葉はポピュラーになりましたが、当時は幼稚園業界では聞くことがない定義でした。当時の文書です。

体験教育について

教育理念の一つである体験教育についてお話致します。教育の根本はどんなに時代が変わろうと不変で、

その年齢に必要な体験は、その時期体験しておかなければならないということです。しかし、教育方法、手段や理論はその時代によって展開されていかなければなりません。なぜなら、子ども達は過去に生きるのではなく、その次の時代を担っていく人達であるからです。現在のことだけでなく20年先、30年先を見通した教育観の許に行なわなければ、子ども達が大人になった時、こんな考えが出来ていたらと思っても遅いのです。そして、こんな事をしていたら…といっても、それが単なるみせかけの英才教育や「のびのびのびろ」だけの雑草教育では駄目なのです。

**社会の変化に積極的に対応し、
真に自分の力で未来を切り開いていく「生きる力」を持つ事が出来る教育でなくては意味がないのです。**

本園の教育理念は、『その年齢に不可欠な適時適量の刺激をもった体験教育をする事』に重点を置いている事にあります。自ら体験する事を通してしか子ども達は育ちません。又、知的能力も幼児期は体験を通してでなければ、ただの金メッキで真の力は身についてきません。

そこで吉塚幼稚園（当時の園名です）の教育がどんなプログラムで体験教育を組んでいるかが大切になってくるわけです。

具体的には専門講師が入っている体育、絵画、水泳だけでなく、縦割り保育やクッキング、ボディペインティング、郵便ごっこ、陶芸、お店ごっこ、10段ボックス活動、3歳児の冒険の旅、そして4歳児のリトミック、5歳児のドッジボールなどが、学年別、領域別目標に対応してその年齢ごとに必要な体験活動をくんでいます。

その年齢に必要な事は十分やっておかないと後ではとり返しがつきません。でも単につめこみの英才教育では、本当の力にはならない事は賢明なお母様はよくご存知でしょう。

**そして、表面に表れてこない
教育の適時適量を考えた体験を通した教育のプログラミングの
仕方に本園の教育の独自性があります。
生きている子ども達はなおさらの事、
その年齢に応じた厳選された
カリキュラムが「適時適量の刺激」で
子ども達の自らの体験を通して、
良いプログラミングで実施されなければ
子ども達の真の育ちの姿はないのです。**

自分の子どもが、頭の良い子に育ってほしくないと思っている親御さんは一人もいらっしゃらないと思います。そして、頭の良い子というのは単に学校の成績が良いと

言う事ではありません。いかに、この社会で生きていくかと言う知恵を持った頭の切れる、自ら、考え、行動し、解決していく力を持つ子どもを育てるかが大切なのです。

つまり、単に、漢字教育や足し算、引き算をする早期教育ではなく、子どもの「**脳を活性化させる教育**」が大切なのです。その為の体験教育を、しっかりと系統付塚幼稚園では実践していきます。

これが今では、「三つの教育」「三つのかわり」さらにドリカムタイムやキラキラタワーでの自主選択保育での科学的な思考を促す遊びや体験、どんどん焼きやかきた大会、郵便ごっここの改良、おみこし、餅つき、お相撲大会など、日本古来の体験保育、

学年別では年少組の冒険保育、プール、年中組のリトミック、四分の一成人式、年中長組の探検保育、クッキーづくり、専任職員の元気モリモリタイム、体育、年長組のドッチボール、なわとび指導や、ウオークラリー、バースディショッピング、

ミュージックコンサート、ミュージカルなどの音楽や表現活動体験、田植え、稲刈り体験などの自然体験、学年別運動会、新幹線体験、クリスマスナイトスクール、特別仕様の四両編成のダイヤにない特別列車ぞうさん号による門司鉄道記念館への卒園旅行、そして、大型壁面を使った造形活動などに発展してきました。

また両親もともに育つ参加型体験学習としてミセスカレッジ、パパズクラブ、パパズチューターなどの保護者も一緒になって活動し、感動を共にする行事にもつながっています。

これこそが茂木健一郎さんが「感動する脳」で述べている「その学びには限界がなく、いろんなことを体験すればするだけで特に意識はしなくても、脳の中に痕跡として残っていくのです。」このことをゆりの樹幼稚園が実現していることになります。

そして、脳の中に痕跡として残るからこそ、それが原風景となって心の育ちになり、脳が活性化することで、考える力が付く、すなわち知能が伸びることになっていくのです。だからゆりの樹幼稚園では、28年前から体験教育を大事に考え、実践してきたのです。

そしてその体験教育は20年先の教育を考え、20年先に大人になって活躍する子どもたちの未来を想定したうえで、園児の成長と共に育っていったのです。

それがゆりの樹幼稚園が考える

★三つの教育★

共育・誓育・、驚育

★三つの柱

1に「**真の自立への道**」(個別性と共感)

2に「**知ることの喜びを与えること**」(自己成長の継続と問題解決能力)

3に「**感動と思い出を作ること**」(生命の尊重と危機管理能力)

★三つの友達とのかかわり

1、**自分の存在の確立**

2、「**私とあなた**」という二者の関係

3、**皆の中の自分という存在**

です。

この体験保育が、さらに感情を大切にした**10Eの『体感教育』**へと繋がりが発展してきました。

10Eの『体感教育』は、私が長い間学んできたいろいろな教育的な心理学をゆりの樹幼稚園の園児、保護者、職員にあうように組み合わせたゆりの樹式心理学的考えを、体験教育に盛り込んだものです。

スモールステップを大切に、成功体験を数多く味わい辛い、悲しい、情けない体験も排除しないで、だからよかったと成長できたと感謝し、その中から学んで成長していく感情に気づく体感保育です。

このことについても感動する脳の中で次のように書いてあります。

何かに成功した体験も、失敗した体験も、同じ一つの体験に変わりがない。成功体験は自分の自信にもつながるし、それをステップに、さらに大きな成功へと導くことが出来ます。また失敗したとしても、その体験があるからこそ次には同じ失敗はしないようにと心がけることが出来る。

どんな体験もその人にとっては糧にすることが出来ると私は考えています。

この言葉こそが「**ゆりの樹幼稚園が目指す人間像**」の一つです。ゆりの樹幼稚園の自主選択し、自己決定による自立の循環を遂げた人がこのように物事を良い方向に目を向けてとらえることが出来るのです。

更にこれが発展すると、心も体も健康で、素直に「あ

りがとう」、謙虚に「ごめんなさい」が、自他肯定し「、わからないから、教えて、助けて、」が言え、「だって、でも、どうせ」を言わないで、今、何ができるかを考えようと、勇気と柔軟性をもって自己決断できる「ゆりの樹幼稚園が目指す人間像」の全体像に育っていくことにつながるのだと感じます。

— (中略) — 人間は人生の各ステージにおいて自らの体験から次々と自分自身を向上させていく。常に新しい学びのステージに立っていく。

— (中略) — 脳は常に働き、次々と新しい体験を蓄積しています。せっかく与えられたこの脳の機能を活用しない手はありません。

またこうもかかれています。

「モーツアルトに
演歌は作れない」
「創造性は学びの
一種である」である

— (中略) — 学校の勉強が
できることと何かを生み出す
創造的な才能は別物であるにとらえがちです。
— (中略) — この才能は全く別のものであると。
— (中略) — しかし、この考え方は、誤解もはなはだしい。— (中略) — 創造性というものはゼロから生まれることはありません。どのようなものを生み出すときにも必ずそのもとになる体験や知識というものがあるわけです。
— (中略) — ベースとなるものがなければ、そこからは何も生まれないということなのです。

— (中略) — 生き物は連続して受け継がれていく。何もないところからは生まれることはなく、必ず前に何かが存在している。実は創造性というものも、これとまったく同じものであると考えられている

— (中略) — 自然が飛躍しないのと同じようにさまざまな芸術もまたゼロから生まれることは決してないのです。

— (中略) — 天才のモーツアルトでさえも、トルコ風の音楽を聴くという体験がなければ、名曲は生み出せ

なかったのです。— (中略) — やはり創造性というものは、自分の体験が基礎になってうまれるもの。

— (中略) — モーツアルトに日本の演歌は作れない。それはなぜか、モーツアルトは日本の演歌をきいたことがないのですから。

だからゆりの樹幼稚園では、その年齢に適した適時適量の教育をプログラミングする体験保育、そして 10E を盛り込んだ体感教育を大切に実践しているのです。

「学校の秀才と
創造的天才のの違い」
「大切なことは、こうして
蓄積された体験をいかに有効
に活用するかということ」

— (中略) — 脳の中で前頭葉は人間が人間として存在する為にもっとも必要な場所

— (中略) — ではこの前頭葉は何を基準にして情報を整理、活用。その基準になるものが「意欲」や「価値観」といったもののなのです。

— (中略) — どのような価値観を持つか、どのような地点を目指していくかで、私達の体験の整理のされ方は違ってきます。

— (中略) — 体験や知識に結び付けられるか否かはその人の生き方と考え方次第ということになってきます。

これはまさしく、ゆりの樹幼稚園で言う「意欲」(10Eのエンパワー・人間力)「価値観」(自己選択と自己決定の自立の循環、何を大切に生きるか)のことを表しています。

— (中略) — 学校で秀才といわれる人は学校のテストでいい点を取るとか親や先生に褒められることを目標としています。— (中略) — それを意欲として勉強に励んでいるわけです、もちろん、それも一つの価値観である— (中略) — しかし、そればかりに頼っていると目標を達したところで終わりになってしまう。

— (中略) — また天才といわれる人を良く見てみると、これらは、決してカンや偶然に頼ったりはしていないのです。自らの体験を知識を十分に生かしている。基礎がないところからは何も生まれないのです。

— (中略) — 新しいものを生み出す想像力というのは体験×意欲です。

この意欲の源はもう保護者の方はご存じの10Eのエモーション(感情)に気づいて、自己決定し、自立をするから(自立の循環)エンパワーが生まれるのです。

そして、前向きに生きることが出来るように「**ゆりの樹の言葉かけ**」があります。

希望に向かって、愛と勇気を携えて、夢を持ち続けることが出来る言葉かけです。役員、委員、ミセスカレッジ、パパズチューターに参加されていらっしゃる保護者の方はご存知の子どもへの言葉かけです。

このことについても「感動する脳」で書かれています。

「根拠なき自信」でも 脳は自信を持つ」

「前向きに生きようは 精神論ではない。実は 脳科学の理屈に合っている」

— (中略) — 前向きの気持ちで生きているときには前向きに生きる時の脳の状態があります。

感情というものに大きく関係する—— (中略) — この部室が前向きに生きる時と後ろ向きに生きるお気とではその状態が全く違ってくる—— (中略) — 人生に意欲を持って生きているときには意欲をもっているときの脳の状態が実際にある。ということは意欲を持っているときの状態を作ってしまう方がいいわけです。

— (中略) — し捨て一度作ってしまうと、自然にやる気が起こってくる。やる気が怒れば具体的な目標も次々と生まれてくるでしょう。

— (中略) — 「自分はできる」と勝手に信じてまう。

— (中略) — そうすると、面白いことに、自信を持っている脳の状態ができあがってしまうのです。

— (中略) — その結果はおのずと変わってくるのです。

だから、ゆりのき幼稚園の「**ゆりの樹の言葉かけ**」

愛のある言葉

言われて嬉しい言葉、ほめ言葉、素敵な明るい挨拶

未来に勇気が出る言葉

気持ちがぴったりの言葉、共感する言葉。

未来に夢が持てる言葉

子ども自身が輝く言葉、達成感を高める言葉、
目標を持てる言葉、具体的に行動できる言葉

未来の希望に繋がる言葉にかえる

子どもに言うてはいけないNGワード 指示、命令後、
否定語を肯定語に変える

で子ども達に、愛と勇気と、夢と希望を与え、自信を与えているのです。

このように「感動する脳」を読めば読むほど、ゆりのき幼稚園の教育理念はコドモたちの成長に役立っていると確信しました。

もちろん私が「感動する脳」や前年度参考文献にした「ひらめき脳」を読んだのはこの2、3年前で、こ

れほど、ゆりの樹幼稚園の教育が脳科学的にも裏付けられたことに驚き、嬉しい気持ちで一杯です。

二年間にわたって、現代脳科学の本をベースにして、本園の教育と重ね合わせて書けば書くほど、ゆりの樹幼稚園の教育は「きらめき脳」そして「感動する脳」を作ると確信しました。すべてをお伝えする紙面がなったことが残念ですが・・・この巻頭言のせめて、どれか1行でもその子育てのお役にたつことができれば幸せです。

この巻頭言のせめて、どれか1行でもその子育てのお役にたつことができれば幸せです。

ゆりの樹幼稚園では、物的環境、人的環境を整え、目の前の事にとらわれない根作りの教育を、将来を見据えて、子どもたちにとって、今なにが大切かを考えて、できる限りの本物の教育を実践してきました。学童期を経て、やがて、成人した時に、このゆりの樹幼稚園で得たことが、芽を出し、実を結ぶことを願いながら・・・。

最後に、卒園児のみなさん、いよいよおわかれの時がやってきます。いつまでも、このゆりの樹幼稚園のことを忘れないでください。

力強く、自分を信じて生きてください。これからも、いつも、どこにいても見守っています。

そして皆さんの成長を楽しみにしています。

私達も、みなさんと過ごした毎日を心に刻んで大切にします。

本当にたくさんの思い出を今年も本当に、本当にありがとう。

この幼稚園からいつまでも、いつまでも大きなエールと声援を送っています。

さよならは、ピリオドではなく、新たな出発に向けての句読点です。

又、会いましょうね。

そして、どんな時も、答えは自分の中にあることを信じて歩いてください。あたたかい家族の愛とともに。

これから先も、のびのびと、健やかに、そして、たくましく、大きく、豊かに育ってくれる事を願いつつ、本年度の「大樹通信」も本号をもって終りとします。

最後に、この言葉を送り、平成24年度最後の園通信と致します。一年間本当にありがとうございました。

「行動変化は自己成長。行動変化は生きているあかし。」

一滴の水もやがて大河になる」

